宮廷儀礼としてのノウルーズ
――16 世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル朝宮廷の比較から――

後　藤　裕加子

は　じ　め　に

前近代までのイスラーム世界における王権と儀礼の問題は，近年になって多くの関心を集めている。サファヴィー朝（1501～1736）は建国と同時にその母体となった神秘主義教団の過激シーア派思想から脱却し，新しい統治原理の確立を図ったが，筆者は以前その具体的な装置のひとつとして，サファヴィー王家がノウルーズの祝祭を宮廷行事として導入したことを指摘した(1)。ノウルーズは広く西アジアで祝われる，古代イラン起源の春分の祭りである。現代のイランではイスラーム起源のヒジュラ太陰暦，西暦，ノウルーズ（春分の日）を新年元旦とするイラン太陽暦（ヒジュラ太陽暦）の 3 つの暦が併用されている。筆者はサファヴィー朝宮廷におけるノウルーズの祝賀行事としての定着時期は，サファヴィー朝最盛期を確立したことで知られる第 5 代アッバース 1 世（在位 1588～1629）が即位する以前，具体的には内政が極度に混乱していた第 4 代ムハンマド・フダーバンダ時代（1578～1588）であったことを示唆したが，紙幅の都合上，より詳細に検討するには至らなかった。

ところで，サファヴィー朝の東の隣国ムガル帝国（1526～1538，1555～1858）は，もともと中央アジアを故地とする王朝であるが，第 2 代フマーユーン（1530～1538，1555～1556）がサファヴィー朝宮廷で亡命生活を送るなど，サファヴィー朝と関係が深く，人の交流も盛んで，その過程で写本芸術な

ど様々なペルシア文化も受容された。第 3 代アクバル（1556～1605）はヒジュラ暦 990 年／西暦 1582 年から「異教（＝ペルシア）の習慣に従っ」て宮廷で盛大にノウルーズの祝祭を行うようになった。1580 年代はサファヴィー朝ではムハンマド・フダーバンダ統治の時代にあたり，その宮廷ではノウルーズの祝祭が年中行事となっていた。アクバルのノウルーズ採用にサファヴィー宮廷の影響を想定することもできようが，これについては，すでに述べたように，当時のサファヴィー朝宮廷，特に首都カズウィーンにおけるノウルーズの開催状況についての更なる検討が必要となろう。

本稿では，ムガル朝宮廷における最初のノウルーズの記述を手がかりとして，サファヴィー朝年代記とムガル帝国年代記のノウルーズに関する歴史叙述を比較・検討し，更に 16 世紀後半のサファヴィー朝宮廷行事としてのノウルーズの機能とその起源について，年代記史料からさまざまな事例を紹介しながら若干の再考を加えてみたい。

1．ムガル朝宮廷におけるノウルーズ

すでに述べたように，ムガル朝宮廷におけるノウルーズの起源は明らかである。1582 年にカーブルで異母弟ムハンマド・ハーキムの反乱を平定したアクバルは，その「勝利をよろこびそれを記念する祝いを三月に執り行なうことにした。」[(2)]以後，厳格なスンナ主義者であった第 6 代アウラングゼーブ（1658～1707）がイスラームに反する慣行の中止命令を出し，ペルシアの異教の習慣として中止されるまで，ノウルーズの祝祭はムガル朝宮廷の年中行事となる。同じ年にアクバルは新宗教ディーン・イ・イラーヒーを発布し，2 年後の 1584 年にはノウルーズを新年元旦，自身の即位の年（1556 年）まで遡ってこれを初年とするイラーヒー暦を採用した。これらの新制度採用に政治的意図が働いたことは確かであろうが[(3)]，それについては順次検討することにして，ここではまずムガル朝宮廷におけるノウルーズの様子をみてみよう。

1579 年にイエズズ会からインドに派遣されたスペイン人宣教師モンセラー

テは，当時の首都ファテプール・シークリーで催されたアクバルの最初のノウルーズの場に居合わせ，詳細な記述を残している。

> この年ゼラルディヌス王（＝アクバル）が執り行なった九日間の祭り（＝ノウルーズ）には多額の費用が用いられ，人びとも豪華な衣服をまとい，立派な飾りつけや装飾が施され，目を見張るような競技も行われた。多くの人びとの語ったところによると，この三〇年間これまでのどの王もこの時の祭りほど立派な祭りを執り行なったことはなかったという。王宮の大広間の壁や柱には一面に金を使った絹の布が吊してあった。また毎日王の指示でさまざまな競技やいろいろな催物が行なわれた。王自身は王位をあらわすしるしを身につけ王冠をいただき，階段を登った先にある金張りの玉座に坐していた。彼は自分につき従って来ていた大勢の高官に気前よく贈り物を分け与え，あらゆる階層の人びとに歌ったり踊ったり跳ねたりして歓びを現わすよう触れを出した。またこの祭りのためにやって来た人びと全員に大量の酒と食べ物をふるまいもした。(4)

アクバル時代に書かれた主要なムガル帝国年代記には，*Akbar-nāma*, *Ṭabaqāt-i Akbarī*, *Muntakhab al-tawārīkh* の 3 書があるが，モンセラーテの記述とこれらのペルシア語年代記の記述を総合し，ムガル朝宮廷における最初のノウルーズの様子をまとめると，次のようになる(5)。

・アミールらに分担させ，王宮の特別謁見の間（ディーワーン・イ・ハーッサ）と公衆謁見の間（ディーワーン・イ・アーンマ）を高価な緞帳で装飾
・王宮の中庭に天幕を張り，宝石をはめ込んだ金張りの玉座を配置
・ノウルーズ初日アクバルは玉座に座し，アミールや高官が地位に従い参列
・日替りでアミールら高官が祝宴を主催，アクバルは毎昼夜 1～2 回訪問
　（高官主催の祝宴は王宮で催される場合と私邸で催される場合がある）
・ペルシアやインドの音楽家や踊り子による芸能や競技などの催し物の開催
・18 日間続く祝祭（更に 19 日目に大きな祝祭開催）

・日を決めて庶民やアミールらの参賀が許される

・ファテプール・シークリーとアグラの市場の装飾

・アミールや高官たちの昇給・昇進などの人事，贈り物の授受

以後も，このノウルーズの形式はほぼ踏襲される。主題から逸れるため，ここでは深く立ち入らないが，*Akbar-nāma* では，毎年のノウルーズにどこの地方の支配者が参内したか，またはしなかったため不興を買ったか，誰が何を貢ぎ物として送ってきたかなどが，詳細に記述されている。Richards はファテプール・シークリー時代に帝国の諸制度や儀礼が確立されたことを示唆しているが，年の変わり目であるノウルーズを口実に利用しての毎年の宮廷出仕は，ムガル皇帝と臣下との主従関係を定期的に確認するための制度になっていったといえよう。そして，この機会にアミールや高官たちのマンサブやジャーギールなどの加増が申し渡されている(6)。もうひとつ注目すべき点は，最初からノウルーズの宮廷行事が一般民衆に開かれていることである。そして，城下の市場が飾りつけられることによって，ノウルーズは王都を舞台に王権を広く一般にアピールする機会と位置づけられたのである(7)。

2. ノウルーズと歴史叙述

それでは，宮廷祝賀行事としてのノウルーズの導入にあたり，記録を残した著者たちは，この出来事をどのように受け止めていたのであろうか。ムガル朝宮廷においても，ノウルーズは未知の真新しい行事というわけではない。*Akbar-nāma* にも，アクバルが即位 13 年目の 975 年／1558 年にチトール征服の後，帰還の途中でアジメールでノウルーズを祝っていることが記録されている(8)。モンセラーテも次のように述べる。

> （ノウルーズを祝うのは）これは一年の始めをモンゴル人（＝ムガル人）はユダヤ教徒とひとしく三月においているからで，これはマハンメデス（＝イスラーム教徒）の規律ではなくこの地の異教の習慣［ペルシャの風

習］に従ったものである。……というのは，三月になるとソグディアナ人，バクトリア人，スキュティア人，そして三六度以北に住むその他の人びとの地では，ヨーロッパとひとしく春が訪れ，……鮮やかな新緑の野や丘ではあらゆるものが微笑んでいるように見えるからである。この月の最初の九日間，この地の人びとは仕事を休み野原や庭に出て立派な宴を催し，またいつもより立派で高価な衣服を身にまとって出歩くのである。(9)

ムガル王家の人びとはもともと中央アジアからインドに移住したティムール王家の子孫であり，同地のペルシア文化およびトルコ・モンゴル系の遊牧文化の伝統を受け継いでいた。モンセラーテの記述からも，もともと古代ペルシアに起源を溯るノウルーズがイラン系定住民，トルコ・モンゴル系遊牧民の別に関わらず中央アジア・イランで一般に広く祝われていたこと，現在でもそうであるように，春の訪れを楽しむために草原に行楽に出かける習慣があったこと，ムガル朝宮廷人たちの間にノウルーズがイスラームの習慣でないという認識があったこと，の 3 点が読み取れる(10)。

Akbar-nāma, *Ṭabaqāt-i Akbarī*, *Muntakhab al-tawārīkh* の 3 書は，いずれもアクバルの同時代年代記である。第 1 章で言及したように，アクバルはノウルーズ導入の 2 年後の 1584 年にノウルーズを新年元旦とするイラーヒー暦を制定し，年月名もペルシア風のものを採用した。アクバルの側近中の側近アブー・アルファズルの書いた *Akbar-nāma* や *Ṭabaqāt-i Akbarī* は，アクバル期の記述からイラーヒー暦に従った編年体の記述法を採用するようになる。一方，厳格なスンナ派ムスリムで，アクバルとアブー・アルファズルの折衷主義的宗教政策に批判的だったバダーウーニーは，ヒジュラ暦による記述を貫く。年代記作家の対応の違いが示すように，草原などでの散策や近親との祝宴が普通だったノウルーズの祝賀行事を首都の王宮施設で華々しく挙行することは，単なるペルシア趣味の現われではなく，新宗教やイラーヒー暦の導入と連動し，王権強化を目的としたアクバルが綿密に計画・実行した政策のひとつだったのだろう(11)。だが，異教起源の習慣であったことが理由となり，ノウ

ルーズの祝賀行事は最終的にアウラングゼーブにより廃止される。

ムガル帝国年代記の歴史叙述について研究した Conermann は，アクバル時代から叙述形式に編年体が採用され，以後これが維持されることを指摘したが，イラーヒー暦採用との関わりについては言及していない(12)。サファヴィー朝年代記の歴史叙述について研究した Quinn は，アッバース 1 世時代に年代記の内容構成が世界史から王朝史中心に移行したとして，サファヴィー朝歴史叙述の転換期であったと位置づけている。もともとイスマーイール 2 世（1576～1578）の命を受けて書かれた年代記である *Khulāṣat al-tawārīkh*（以下，*Khulāṣat*）は，唯一現存する第 5 巻がアッバース 1 世時代をカヴァーする，アッバース 1 世時代最初の年代記であるが，Quinn は同書を形式上はそれ以前の世界史に分類されるとする。*Khulāṣat* はノウルーズを新年元旦とする編年体叙述形式を最初に採用したアッバース 1 世時代の年代記であるが，これについては特に触れていない(13)。ムガル帝国年代記の歴史叙述との比較で，Quinn はバダーウーニーと *Tārīkh-i Āram-ārā-yi ʻAbbāsī*（以下，*TAAA*）の著者イスカンダル・ベク・ムンシーが等しく *Akbar-nāma* を参照していたことなどから，2 つの王朝がティムール朝末期の歴史家ハーンダミールを架け橋として，同じ歴史叙述の伝統を継承していたことを指摘している(14)。ノウルーズを年始とする歴史記述が両王朝でほぼ同時期の 16 世紀後半以降に登場したことも，この伝統上の傾向と考えられよう。だが，その時期が宮廷行事としてのノウルーズの導入以後であることは，両王朝の王権強化政策の，その歴史叙述への影響を示している。

しかし，サファヴィー朝年代記でトルコ暦と称される東アジア起源の十二支が年名に使われる一方で，月名はヒジュラ暦の月名が使い続けられるのに対して，ムガル帝国のイラーヒー暦ではペルシア風の年月名が使われるなど，相違もなくはない。ペルシア語を宮廷の行政用語とした両王朝の歴史叙述の比較，王権思想をはじめとする，政治的・社会的・文化的共通性と差異の問題など，両王朝関係史において今後明らかにすべき課題は少なくない(15)。

3. サファヴィー朝の首都カズウィーンとノウルーズ

すでに述べたように，ノウルーズはイラン暦の新年元旦であるとともに春の訪れを祝う古代ペルシア起源の祭であり，人びとは連れ立って郊外の草原などを散策して新緑を楽しむ。草原を求めて移動する遊牧民族であるトルコ人やモンゴル人にもこの習慣は馴染みやすいものだったに違いない。サファヴィー朝でもイスマーイール 1 世時代からすでにノウルーズを祝っていたことは年代記などから確認される。しかし，それは遊牧民にとって大切な活動の場である牧草地であったり，都市の内部では，緑の豊富な庭園の中であった(16)。ヴェネツィアの使節メンブレは 1540 年に当時の首都タブリーズにタフマースプ 1 世の宮廷を訪れ，ここでのノウルーズの様子を記録している。

> 彼らが（トルコ語で祭を意味する）バイラムと呼ぶイースターの祭（＝ノウルーズ）が祝われ，私がすでに（断食明けの祭の所で）述べたようなやり方で多くの祝祭が催された。メイダーン（広場）に天幕が張られ，ポロ競技が行われた。翌日には王の宰相カーディー・イ・ジャハーンがシャーに壮大な贈り物をした。……聞くところでは贈り物は 1,000 トマーンもの価値があるとのことで，これは 40,000 ダカットに相当する。……翌日，シャーは彼の宰相カーディー・イ・ジャハーン宅に饗応を受けに行き，そこに三日間滞在した後，帰還した。すべてその宰相の負担だったが，私が思うに，毎日間違いなく 3 千人を越える人間が飲食していた(17)。

サファヴィー朝の最初の首都タブリーズにおいて，シャーが謁見を行なう王宮は市内の壁に囲まれた庭園の中に再建されたもので，東側に面してメイダーンがあった。すでに多くの研究が指摘しているように，東方イスラーム世界の遊牧系王朝は，その遊牧的心性から都市よりも郊外を好み，都市建築および宮廷建築において庭園や広場を重視した(18)。メンブレはノウルーズの祝宴の会

場がどこであったのか明確には述べていない。しかし，彼が共通点を指摘する断食明けの祭においては，シャーの移動宮廷がメイダーンに張られた天幕に設置され，三日間にわたって祝宴が続けられたとあり（Membré，p. 32），ノウルーズの祝宴も同様にメイダーンに張られた天幕で挙行されたのであろう。いずれにせよ，ダブリーズ時代のノウルーズには，ムハンマド・フダーバンダ時代に見られるような，都市内の王宮で催される儀礼的な祝賀行事とといった，政治的色彩は薄いといってよいだろう。

タフマースプ 1 世は 1550 年代の半ばにタブリーズからカズウィーンに遷都するが，Babaie はこの首都移転と建築活動が，ティムール朝時代までのトルコ・モンゴル的な庭園重視の宮廷建築様式から，後のアッバース 1 世の建設した首都イスファハーンの宮殿とメイダーンの複合建築から成る宮廷建築様式への転換点となったとする(19)。カズウィーンは市壁に囲まれた都市で，南北に伸びる軸に沿って馬の広場 maidān-i asp が建設され，その北端にアリ・カプ門がある。門の背後に広がるサアーダトアーバード庭園 bāgh-i Saʿādat-ābād が王宮地区で，一般からは隔絶された空間であった。メイダーンは閲兵式や競技や祭や使節の謁見などが行われる，王権誇示の場であった。サアーダトアーバード庭園は小径や水路で庭を 4 分割するチャハール・バーグ様式で造成され，その交点にチェヘル・ソトゥーン宮殿 īwān-i Chihir-sutūn が建設された。同宮殿は外観が八角形で内部は中央の空間を 8 つの小空間が取り囲む，ハシュト・ベヘシュト様式で建設された小ホールで，タフマースプ 1 世がカズウィーンに建設した王宮建築としても，また 16 世紀のサファヴィー朝王宮建築としても当時のまま現存する唯一のものである(20)。Babaie はこのチェヘル・ソトゥーン宮殿は謁見・祝宴・より私的な儀礼が行われる場で，これが庭園の交点に配置されたことは，権威の概念やその表現に新たな変化があったこと，チェヘル・ソトゥーン宮殿が庭園内の王宮地区の物理的な中心であり，王家の象徴として機能していたとする。

イスマーイール 2 世とムハンマド・フダーバンダの時代のカズウィーンについての考察はほとんどないが，ムハンマド・フダーバンダ時代のノウルーズ

がカズウィーンで行われている場合，ほぼ例外なくチェヘル・ソトゥーン宮殿で行われていたことが記録されていて，Babaie の考察と一致する(21)。ノウルーズ以外の儀礼としては，イスマーイール 2 世からアッバース 1 世まで，チェヘル・ソトゥーン宮殿はその即位式の場，または最初の謁見の場となっている。アッバース 1 世時代初期に書かれた代表的な年代記であり，イスマーイール 2 世とムハンマド・フダーバンダの時代の同時代年代記でもある *Khulāṣat* と *TAAA* の記述から，その様子を明らかにしていこう。

> （984 年）ジュマーダー I 月 27 日／1576 年 8 月 22 日水曜日，イスマーイール 2 世即位の儀が執り行なわれ，チェヘル・ソトゥーン宮殿で盛大な祝祭と壮麗な宴が催された。アミールたち，王子たち，政府の高官たちが集まると，イスマーイール王子は威風堂々と宮殿にお出ましになり，王の座に着き，亡き父王の後を継いだ。……まず王子たちが前に進み出で，サイイド，ウラマー，ムジュタヒドがこれに続いた。その後にアラムート城砦から連れ出されて来たグルジアのラワンド・ハーンの息子のイーサー・ハーンとルアルサブ王の息子のスヴィモンが進み，ロルのシャー・ルスタム，高位のアミールたち，キジルバシュの貴顕たち，宰相たちや官僚たち，諸地方の有力者や住民たち，ニザーム・シャーや（ラールの支配者）イブラーヒーム・ハーンやマーザンダラーンの支配者ミールザー・ハーンやアラビスタンの支配者サイイド・サッハールから（派遣）の使節たち，ヨーロッパからの使節たちがシャーの足下への接吻の栄誉に浴した。イスマーイールが牢獄を出てから彼の即位の日まで宮廷に届けられた近隣の王たちからの贈り物は，王の御前に運ばれた。(22)

これは，*TAAA* に書かれたイスマーイール 2 世の即位式の様子である。王族，サイイド，ウラマー，ムジュタヒドなどの宗教権威，キリスト教国であるグルジアを含めた周辺地方王朝の王族たち，アミールやキジルバシュなどサファヴィー王家を軍事面で支えるトルコ系遊牧民たち，官僚たち，と王朝に関わ

るあらゆる集団の有力者たちが列席し，イスマーイール 2 世の即位と新王の権威が彼らに誇示され，そのための場としてチェヘル・ソトゥーン宮殿が機能していることが確認される。*TAAA* と *Khulāṣat* では，列席した諸集団の多くは重なる。*Khulāṣat* は王族の名前を詳細に列挙するが，地方王朝の王族たちの名前はほとんど挙げられていない。また，列席の序列は 2 年代記で異なっており，王族が筆頭に来るのは同じだが，*Khulāṣat* では宗教権威は軍人や官僚など支配者層の後に並べられている。記述に際して両年代記作者たちにどの様な政治的意図が働いていたのか，即位式に関して定められたプロトコルがあったのかどうかは不明である。また，謁見儀礼に関する記述で，ペルシア語史料に普遍的に登場する表現に足下への接吻 pāyi-būs がある。「跪いて足下に接吻して臣下の礼を取る」ことだが，この当時の pāyi-būs にも定められた手順があったのかは全くわからない。同義の表現に，地面への接吻 zamīn-būs や跪拝 sijda がある。これらの表現の違いも不明であるが，バダーウーニーによれば，アクバルは 1582 年の新制度導入の際，sijda（zamīn-būs）も定めた（*Muntakhab*, p. 310）。宮廷儀礼における謁見の詳細については，更に多くの事例を集めて検討しなければならない問題であろう。

ムハンマド・フダーバンダの即位はイスマーイール 2 世暗殺後の混乱状況の中で行われ，カズウィーン市内入城が占星術師たちの選んだ日時に行われたこと以外には，詳しいことは書かれていない。一方，彼の即位後最初のノウルーズには詳細な記述がある。

> シャーの最初のノウルーズは寅年，アラブの暦で同年（986 年／1578 年）のムハッラム月元旦／3 月 10 日月曜日で，……称賛すべき特性をお持ちのシャーはこの吉兆の年を首都のカズウィーンで喜びと幸福，安定と落ち着きをもって過ごされた。火曜日にはチェヘル・ソトゥーン宮殿にお出ましになり，ハーンたち，アミールたち，国の重臣たち，宰相たち，諸地方のアーヤーンたちは，宮殿でシャーとハムザ王子の足下に接吻する栄誉に浴し，祝詞を奏した。イシクアガシたちやミフマーンダールたちが天

上の宴を整え，各々に相応しい席を用意し，盛大な祝宴が催された。(23)

タブリーズを首都としていた時，タフマースプ 1 世はメイダーンに天幕を張ってノウルーズの祝賀行事を催していた。カズウィーン遷都後やイスマーイール 2 世時代のノウルーズについては，ほとんど記述が残されていないが，タフマースプ 1 世死去の 1 年前の 982 年／1575 年には「チェヘル・ソトゥーン宮殿にお出ましになった」（*Khulāṣat*, f. 237 b）とあり，カズウィーン遷都と王宮地区の建設によって，ノウルーズがチェヘル・ソトゥーン宮殿という王宮施設を舞台に行われる，王権誇示の儀礼に変化していったことは確かであろう。ムガル帝国のアクバルがノウルーズの祝賀行事を宮廷に導入したのは 1582 年，サファヴィー朝ではムハンマド・フダーバンダ期にあたり，すでに宮廷行事としてのノウルーズが定着していた。そして，その先進性や類似性から鑑みて，アクバルのノウルーズ導入も，彼の独自のアイディアというよりも，人的交流の多かったサファヴィー朝宮廷のノウルーズの祝賀行事について見聞し，着想を得たと考えるのが自然であろう。

タフマースプ 1 世の最後のノウルーズでは「庭園や牧草地や広場のバラやチューリップやジャスミンやハーブが芽吹いた」という表現があり，ノウルーズが王宮の宮殿での祝賀行事として定着する一方で，新緑や散策を愛でる遊牧的心性も失われていないことがわかる。アッバース 1 世が統治能力のない父王ムハンマド・フダーバンダを廃してイラン全土のシャーとして即位する前，彼はすでに周囲のアミールらの後押しでイラン東北部ホラーサーン地方の支配者として即位していた。*Khulāṣat* はアッバースがホラーサーンのどこでノウルーズを祝ったかを記録しているが，ヘラートやマシュハドの庭園が会場となっていることは興味深い(24)。アッバースはホラーサーンのキジルバシュのアミールたちによって，サファヴィー朝の首都のあったイラン北西部を拠点としていたアミールたちへの対抗心から擁立されたが，一地方の君主にすぎないこの頃のアッバースには，意図的に王権を誇示する政治的必要はなかった。ホラーサーン時代のアッバースのノウルーズには，庭園を重視する伝統的な遊牧民

の宮廷概念やノウルーズの祝祭のあり方が反映されているといえよう。

ところがアッバースがイラン全土の王として即位すると状況は一転する。即位後に迎える最初のノウルーズの直前，アッバース 1 世はウズベク族との戦いのためにホラーサーン方面に遠征中であった。アッバース 1 世の擁立の立役者で宮廷の実力者であったムルシド・クリー・ハーンは，ノウルーズを目前にして，「シャーの臣下たちがその年の変わり目を聖なるダウラト・ハーナで過ごすため，すぐに出立しなければならないと（考え），落ち着きと我慢を失った。要するに，アミールたち，ガーズィーたち，コルチたちや他の兵士はこの不意の出立で生じた混乱や動揺で，留まる理由もなく，出立もできず，落胆した」(25) という。アッバース 1 世にとってイラン全土のシャーとしての即位後初めてのノウルーズの祝賀行事は，新しいシャーの権威を誇示し，主従関係を確認するための大切な儀礼であり，遠征を途中で切り上げ軍を混乱に陥れてでも，首都で行われるべきものとして捉えられていたのである。もっとも，このときシャーの一行は結局ノウルーズまでにカズウィーンに帰還できず，カズウィーン郊外で盛大な祝祭を催している。

首都カズウィーンに滞在しているとき，アッバース 1 世は「通例に従ってカズウィーンのダウラト・ハーナのチェヘル・ソトゥーン宮殿で」（*TAAA*, I, p. 518）ノウルーズの祝祭を催した。アッバース 1 世時代になってノウルーズが支配者層に対してだけでなく，一般民衆へのアピールを意識するようになったことについては前稿で指摘したが，この試みはカズウィーンが首都だった時代にすでに観察される。

> この年（未年）のノウルーズはこの年（1003 年）のラジャブ月 10 日／1595 年 3 月 21 日日曜日（実際には火曜日）であった。……神の陰たる御方（＝シャー・アッバース）は新年の祝賀のために首都カズウィーンにおわし，ダウラト・ハーナのチェヘル・ソトゥーン宮殿で王に相応しい盛大な饗宴を催し，宮廷にいた諸国のスルタンたちや王子たち――例えばホラズムの王ハッジ・ムハンマド・ハーン，マルヴ・イ・シャーヒージャ

ーンの支配者のヌール・ムハンマド・ハーン，アラビスタンの支配者のサイイド・ムバーラクの息子，グルジアの王子たちやロシアや他の諸外国の使節たち――を天上の宴に招き，新年の到来の祝賀に満たされつつ，数日間を歓喜のうちに過ごした。市内のバーザールは飾りつけられ，サアーダトアーバードの広場ではポロの対戦や弓術が行われた。10 日から 12 日の間全ての人間は見物や歓談や休息をして過ごした。(26)

カズウィーン市内のバーザールを飾りつけ，また民衆に王宮地区への出入りを許すことは，王家を含めた支配者層と民衆がノウルーズを共に祝うという一体感を演出するとともに，民衆に王権の威光を目の当たりにさせる効果が狙われているといえよう。これより先，998 年／1590 年にはじめてイスファハーンでノウルーズを過ごした時には，アッバース 1 世は「卑賤の者たちや臣民のみならず全ての創造物の問題に目を向けた。週に 2 回ナクシェ・ジャハーン（宮殿）のディーワーン・ハーナのエイワーン（＝ホール）をディーワーン・イ・アーンマ（公衆謁見の間）とし，自らひとりひとりに聴取を行っ」て（*Khulāṣat*, f. 421 b），同地での状況把握と人心掌握に努めたのである。

お わ り に

以上，16 世紀後半のサファヴィー朝とムガル朝宮廷におけるノウルーズの祝賀儀礼の様子を紹介し，16 世紀後半の両宮廷において新たに確立されたノウルーズの宮廷儀礼が，王権誇示の機能を果たしていたことを明らかにした。また，サファヴィー朝においては首都カズウィーンの王宮建築が儀礼の舞台となり，王権の象徴としての役割を担っていたことを確認した。しかし，前近代の東方イスラーム世界における王権と諸儀礼の問題全体について考えた場合，両王朝以前の諸王朝におけるノウルーズの祝われ方，即位や婚姻，謁見の儀礼に代表される様々な宮廷儀礼など，この分野の研究にはまだまだ解明されなければならない課題は多いといえよう。

注

(1) 例えば，間野英二「十五・十六世紀，中央アジアにおける君臣儀禮――その一會見の儀禮」『東方學』109（2005），pp. 1−23。同稿の序文およびその脚注の研究動向が参考になる。羽田　正「ペルシアと日本の王権と儀礼――ヨーロッパ旅行者による観察」網野善彦ほか編『岩波講座　天皇と王権を考える　5　王権と儀礼』岩波書店，2002，pp. 199−220。後藤裕加子「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』No. 61（2004），pp. 20−46。サファヴィー朝初期についての関連文献は，同論文脚注(1)を参照。

(2) アントニオ・モンセラーテほか（清水廣一郎ほか訳解）『ムガル帝国誌　ヴィジャヤナガル王国誌』（大航海時代叢書（第 II 期）5）岩波書店，1984, p. 155。

(3) R. Burn ed., *The Cambridge History of India*, vol. 4., Delhi, 1963, p. 128−129, 134, 230. Richards はファテプール・シークリー遷都以前，多数派のヒンドゥー教徒を取り込みながら，イスラーム国家の支配者としての権威の維持・強化を目指すアクバルとスンナ派ウラマーとの間の確執が先鋭化し，ムハンマド・ハーキムの反乱などに繋がったこと，遷都時代（1571−1585 年）に帝国の諸制度が整備され，皇帝を中心に据えた新しい帝国のイデオロギーが創出されたことを述べている（J. F. Richards, *The Mughal Empire, The New Cambridge History of India I: 5,* Cambridge, 1993, pp. 29−49.）。また，皇帝や帝国の権威を公的に表明する場として，ファテプール・シークリーの建築が着手されたこと，帝国の諸制度が皇帝とアミールや官僚との間の忠誠心や利害関係の上に成立していたこと，その関係確認のために，両者が様式化されたインド・ペルシア風の礼儀作法や儀礼を共有したとする（J. F. Richards, “The Formation of Imperial Authority under Akbar and Jahangir”, in *Kingship and Authority in South Asia,* J. F. Richards ed., Delhi, 1998, pp. 285−326.）。ファテプール・シークリーのプランや機能については，C. B. Asher, *Architecture of Mughal India, The New Cambridge History of India I: 4,* Cambridge, 1992, pp. 51−67 を参照。

(4) 『ムガル帝国誌』p. 156。

(5) Abū al-Faḍl, *The Akbar Nāma of Abu-l-Fazl*（Bibliotheca Indica: A Collection of Oriental Works），3 vols. H. Beveridge tr., Delhi, 1902−1939（reprint 1972−3），III, pp. 557−560. Khwāja Niẓām al-Dīn Aḥmad, *The Ṭabaqāt-i Akbarī of Khwāja Niẓāmuddīn Aḥmad,* B. De tr., B. Prashad ed., 3 vols., Delhi, 1911−1940（reprint 1992），II, pp. 554−556. ʻAbd al-Qādir al-Badāʼūnī, Muntakhabu-t-tawārīkh by ʻAbdu-l-Qādir ibn-i-Mulūk Shāh known as al-Badāoni, W. H. Lowe tr. & ed., 3 vols., 1884−1925（reprint vol. 2, Patna, 1973），II, pp. 310. De が脚注で指摘しているように，最初のノウルーズや他のいくつかの出来事の起った年度に 3 つの年代記の間で 1 年のずれが生じている

（*Ṭabaqāt*, II, pp. 554−555, 559）。*Akbar-nāma* では最初のノウルーズはアクバル即位 27 年目，ヒジュラ暦 990 年／西暦 1582 年，*Ṭabaqāt-i Akbarī* では即位 28 年目，同 991 年／1583 年，*Muntakhab al-tawārīkh* では即位 28 年目，同 990 年／1582 年の出来事となっている。これらの混乱はヒジュラ太陰暦とイラン太陽暦との調整の過程で生じたのであろう。いずれにしても前後の出来事や描写からこれらが最初のノウルーズを指していることは確かである。なお，真下裕之「Ṭabaqāt-i-Akbarī における年代の錯誤について」池田知久編『論集「原典：「古典学の再構築」研究成果報告集 II」2003, pp. 191−214 があるが，筆者は未見。

(6) (3)参照。*Ṭabaqāt-i Akbarī* によれば最初のノウルーズの初日とファルヴァルディーン月（イラン暦 1 月）19 日（sharaf）に集会が催され，以後も同様の集会の開催が決められたという。例えば，アクバル即位 31 年目のノウルーズの sharaf の日には，数人の有力者が宮廷に参内し，アクバルへの謁見を認められた。また，彼らに伴われたカシュミールの支配者は訊問の末に一旦その任を解かれた。ムガル王朝の支配に反抗的だったバルーチスターンに派遣されていた軍も同地のリーダーたちを伴って帰還して迎えられ，アクバルの側近の一人でアフガン方面に派遣されていたラージャ・トダル・マルもこの日に合わせて帰還・参内している（*Akbar Nāma*, III, pp. 738−739）。昇給・昇進に関しては，*Akbar Nāma*, III, pp. 889, 998, 1177 など。

(7) また，アブー・アルファズルによれば，ノウルーズの最初の 3 日間と 19 日目の夜に公にイルミネーションが実施される（Abū al-Faḍl, *Ayeen Akbery or The Institutes of the Emperor Akber*, vol. 1. F. Gladwin tr., Calcuctta, 1783（2nd. ed. London & New York, 2000），p. 245）。

(8) *Akbar Nāma*, II, pp. 481−482.

(9) 『ムガル帝国誌』pp. 155−6。

(10) アブー・アルファズルも，古代の風習が（人々の王権への）敬意を深めるのに役立つことをアクバルが知っており，ノウルーズを初めとする古代ペルシアの風習を導入したと説明する（*Ayeen Akbery*, p. 245）。同じようにトルコ系遊牧民の血と習慣を保持していたサファヴィー朝でもイスマーイール 1 世やタフマースプ 1 世がノウルーズを郊外の牧草地や市内の庭園で開催した（「ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」pp. 38−39 および表 1 参照）。これについては本稿第 3 章でも検討される。ムガル帝国の創始者バーブルは，遠征の途中でノウルーズのことを詩に詠んでいる（間野英二訳著『バーブル・ナーマの研究』I 校訂本，松香堂，1995, p. 231）。

(11) アブー・アルファズルは，新暦導入の理由に複数の暦の並行使用による諸活動の混乱を挙げるが，一方でイスラームとヒジュラ暦を不可分と考える勢力，おそらくはスンナ派ウラマーなどとの対立があったことを示唆する（*Ayeen Akbery*, p.

296)。ジャハーンギールはイラーヒー暦を継承したが，即位 2 年目から再び太陰暦に戻した（近藤　治『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会，2003, p. 174, 335)。

⑿ S. Conermann, *Historiographie als Sinnstiftung: Indo-persische Geschichtsschreibung während der Mogulzeit*（*932–1118/1516–1707*），Wiesbaden, 2002, p. 164.

⒀ S. A. Quinn, *Historical Writing During the Reign of Shah 'Abbas: Ideology, Imitation and Legitimacy in Safavid Chronicles,* Salt Lake City, 2000, p. 25. 紹介している 2 つの年代記の書誌情報については，脚注㉒参照。

⒁ *Historical Writing*, p. 128–129.

⒂ イラン人のムガル帝国への移住と両王朝関係史については，Mashita Hiroshi, "Iranians in the Early Modern India, in Usuki Akira et all ed., *Population-movement beyond the Middle East*（*JCAS Symposium Series 17*），Osaka, 2005, pp. 291–303 に簡潔に研究動向がまとめてられている。

⒃ ⑽参照。

⒄ Michele Membré, *Mission to the Lord Sophy of Persia*（*1539–1542*），tr. & ed. A. H. Morton, London, 1993（repr. 1999），p. 36.

⒅ イル・ハーン朝については例えば羽田　正「「牧地都市」と「墓廟都市」――東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』49: 1（1990），pp. 1–29。ティムール朝については例えば L. Golombek & M. Subtelny eds., *Timurid Art and Culture: Iran and Central Asia in the Fifteenth Century,* Leiden-New York-Köln, 1992 がある。本稿の主題であるサファヴィー朝については，建築史の視点から，S. Babaie, "Building on the Past: the Shaping of Safavid Architecture, 1501–76" in J. Thompson & Sh. R. Canby eds., *Hunt for Paradise: Court Arts of Safavid Iran 1501–1576,* New York & Milan, 2003, pp. 27–47. M. Szuppe, "Palais et Jardins: le complexe royal des premiers Safavides à Qazvin, milieu XVIe- début XVIIe siècles", *Res Orientales,* VIII, 1996, pp. 143–177. Sh. R. Canby, *The Golden Age of Persian Art 1501–1722,* London, 1999, pp. 40–79 がある。タブリーズの王宮と建築プランについては，Membré, p. 29 および，メンブレの記述にもとづいた *The Golden Age*, pp. 46–47 参照。

⒆ "Building on the Past", pp. 37–44. なお，タフマースプ 1 世の遷都の理由については，E. Echraqi, "Le Dār al-Salṭana de Qazvin, deuxième capitale des Safavides, in Ch. Melville ed., *Safavid Persia,* London & New York, 1996, pp. 105–115 を参照。

⒇ "Palais et Jardins", pp. 160–163. また同論文の地図（p. 149）が当時のカズウ

ィーン市内および王宮地区の概略を知るのに参考になる。

(21) 「ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」p. 40 の表 1 参照。チェヘル・ソトゥーン宮殿が即位式やノウルーズの祝賀行事の会場となったことは，Szuppe も指摘している（“Palais et Jardins”，pp. 161−162）。

(22) Iskandar Beg Turkmān Munshī, *Tārīkh-i Āram-ārā-yi ʻAbbāsī,* 2 jild, Teheran, 1350, I. p. 207. また，Qaḍī Aḥmad Ibrahīmī Ḥusaynī Qummī, *Khulāṣat al-tawārīkh*. MS of Preussische（Deutsche）Staatsbibliothek in Berlin. Standnummer 2^0 2202, Neuwerbung 1895, ff. 255 a−255 b.

(23) *Khulāṣat,* f. 280 a. ノウルーズが西暦で 3 月 10 日なのは，この頃ユリウス暦が使われていたため。なお，前掲論文の表 1 において，ムハンマド・フダーバンダの即位初年のノウルーズに関して記載なしとあるのは，筆者の見落としである。

(24) 「ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」p. 40 の表 1 参照。

(25) *Khulāṣat,* ff. 408 a−408 b. ダウラト・ハーナとは一般に官邸などを意味する言葉で，Szuppe は行政を司るディーワーン・ハーナと同義とする（“Palais et Jardins”，p. 143, 160）。ディーワーン・ハーナはアリ・カプ門のすぐ後ろにあった。Babaie はダウラト・ハーナを王宮地区と解釈している（“Building”，p. 41）。*Khulāṣat* にはアッバースが「ダラウト・ハーナに入り，チェヘル・ソトゥーン宮殿で」王座に着いたという表現がある（*Khulāṣat,* f. 399 a）。*TAAA* では「ダウラト・ハーナのチェヘル・ソトゥーン宮殿 īwān-i Chihil-sutūn-i daulatkhāna」（*TAAA,* I, p. 506, 518）という表現が常套句として使われるなど，事例によっては Babaie の解釈が妥当と思われる。

(26) *TAAA,* I, p. 506. ちなみに，アッバースが即位のためにホラーサーンからカズウィーンに進軍したとき，カズウィーン市民たちは「トルコもタジクも貴賤も，……有力者もアーヤーンも大急ぎで町とバーザールを考えつく限りの方法で飾りつけて出迎えの用意をした」という。なお，即位の儀はチェヘル・ソトゥーン宮殿で行われた（*Khulāṣat,* f. 398 a−399 a. また *TAAA,* I, pp. 371−372）。

――文学部専任講師――